

古典 — 時を超えて共有されるもの 西洋古典学

昨年晩秋に奈良を訪れた。学生時代に何度も通った唐招提寺に来たのはほぼ40年ぶりのこと。その折に古典というものについて思い至ったことがあるので述べてみたい。

門を入ってすぐ目に入る金堂も限りなく美しいが、奥の御影堂に安置されている鑑真和上像に心が逸る。今ではその複製しか見ることができないにしても、その御像の見事に心が打たれ、また和上への敬意に頭を垂れるのは誰しも同じだろう。その気持ちに松尾芭蕉の「若葉して御目の雫ぬぐはばや」の句が共鳴するというのも、ここを訪れるあらゆる人に共通することに違いない。今回の旅で気付いたのは、天平時代に作られたかの御像が芭蕉を感動させ、いま私も、同じ御像を思い浮かべて江戸時代の俳人の言葉に自らの思いの出口を見つけているのであり、これと同じ体験を数知れぬ人々が三百年以上にわたって繰り返してきたのだろうということだ。美術にせよ文学にせよ、古典とはそういうものではないだろうか。時代を超えて、人々はともにそれを味わってきたのである。

私の専門である西洋古典(ギリシア・ローマ文学)で言うなら、例えばソポクレスが描いたオイディプスは、恐ろしい運命に見舞われた憐れむべき男の典型として、あらゆる時代のあらゆる人々に知られている。もしかすると彼以上に悪運の男はいるかもしれないが、オイディプスは少なくとも、その男がより不運な存在か否かを測ることのできる世界標準なのである。それだけでなく、オイディプスの悲劇は現代の私たちにとっても、戦慄を覚えさせる作品である。もう一例をあげるなら、伝染病が世にもたらす惨状の世界標準は、ツキジデスの書いた『歴史』第二巻にある。このように、私たちは古典を通じて、異なる時代の人たちと、思いを通わせたり同じ土俵でものを考えたりすることができる。それが古典の最大の魅力ではないだろうか。

吉武純夫 教授

唐招提寺・金堂の前の筆者



アール・ブリュットとつながり 美学美術史学

私は学芸員を目指して、美学美術史学研究室に所属し、博物館に関する科目を受講しました。また経験を積むために、学内の教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」で勤務しました。本ギャラリーは、文理問わず学部1・2年次の学生が多く時間を過ごす全学教育棟にあり、芸術作品や研究成果、社会活動に関する展示が見られる場です。私はそこで勤務する中で、中庭のパブリックアートをはじめ、「clas」が学生の福利厚生と地域の文化活動を担ってきた歴史をもち、展示を通して人々の知識や興味関心をつなぐ重要な場であることを知りました。昨年10月のコロナ禍が落ち着いた頃には、人とひととの心の繋がりや共感を得る場を目指し、「clas」で「アール・ブリュット」の展示会を企画しました。フランスの画家ジャン・デュビュッフェ(Jean Dubuffet, 1901-1985)が提唱したこの概念は、現在の日本では、「既存の芸術教育に左右されない人々による、自発的な芸術表現」を指す言葉として、障がいの有無を超えて作家の純粋な感性を示す作品などを表します。同ギャラリーの学生3名と事務補佐員で、4か月に渡って企画・運営を行い、100名以上に来場していただいた展示会となりました。ここで得た学びは、どんなに素晴らしい作品であっても、多くの人に正しく永続的に見てもらう事は困難だということです。それでも、保存や展示を目的とせず生活の中で作られた作品が、発見者によって感動され価値づけられるこの「アール・ブリュット」は、作家と鑑賞者の双方にとって、生きる為に身近で重要なものです。その意義を伝えるには、美術の専門的な知識に限らず、人や社会、科学に対して色々なアプローチを試み、多様な学問分野で協力することが重要だと学びました。

川澄祥 博士前期課程2年

展示会「interact-あなたにもある わたしにもある-」
展示風景写真



「英語を学ぶ」 英語学

私が大学で英語学を専攻していると言うと、「英語を学ぶ」と書いて英語学と読むからか、TOEICや英検の勉強をしていると勘違いされることがよくあります。無論、英語の運用能力を高めることは英語学専攻として大事なことで、それだけではありません。「mind」の発音はなぜ「mind」じゃないの?」「なぜ“She is studying English enthusiastically.”と言えないのに“She is studying enthusiastically English.”と言えないの?」のように、「そういうもの」として学んできた言語事実を「なぜ?」と改めて問い直し、そこに隠された様々な仕組みを探る学問が英語学です。「英語を学ぶ」という表現も間違っていないかもしれませんが、「英語について学ぶ」、さらには「英語を通して人間の思考について学ぶ」といった表現の方がより正確だと思います。

英語学研究室では、文の構造や規則について研究する統語論、歴史について研究する英語史、発音の規則について研究する音声学、綴りや文字について研究する書記体系論などを専門的に学び、概論講義では上記以外の様々な分野の入門的な知識を得ます。このように、英語について、文法、歴史、綴りなどの様々な側面から学べるのが英語学研究室の特徴です。

また、年に数名、英語についてより深く学ぶために海外留学をする人がいることも特徴の一つです。私自身、英語史をより専門的に学ぶためにオスロ大学へ留学し、自身の専門へのより深い理解はもちろん、勉学に対する能動的な姿勢を培うことができました。先輩から留学に関する情報やアドバイスをもらえることができるため、留学に興味がある人にとっても当研究室は最適な環境であると思います。

皆さんも文学部で英語について学んでみませんか?

古澤壮太郎 学士課程4年

留学先の入学式の様子



月刊 名大文学部 第138号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のもので、
2024年3月10日発行